森の石松のモデル　毛利の石松

森　田　龍　児

昨年5月当会の一女性会員が訪ね来られた時、その数日前入手した石松の父親の資料を見せたところ昭和57年福山城友の会の機関誌「友の会だより」に寄稿した「森の石松の墓について」を書き直して寄稿して欲しいとの事で此の度会員でもない私があえて書かせて頂いた訳です。

実は石松の従弟の子孫が話されるのを大袈裟と思って書かなかった反面、父親柴田氏が大塩平八郎に関係あるかも知れぬと云う心より大阪府高槻市の村上義光氏（古文書の解読とその指導者）にお尋ねしたところ丁重なお手紙、研究内容、大阪城番武鑑のコピーをお送り戴きました。いささか伝え間違いを含めてその裏付けを得ましたので、書き直しを書かせい頂きます。

今日、森の石松は遠州森町（当時は村）の生れで清水次郎長一家の渡世人と云うのが通説である。これは次郎長の養子が、清水一家の子分衆、客人等や他の親分衆一家の聞き覚えを基にして創作した「東海遊侠伝」を更に浪曲師　広沢虎造が脚色した浪曲によるものである。そして森町に於ては石松の墓が観光資源となり、又、茶生産業者の守り本尊的立場になっているのである。

昭和16、7年頃、森町を訪れた事がある。当時はまだ森町に於ては今程は石松は重きをおかれていなかったのか、茶生産業者は私の質問に対して次の3点を答えて呉れたのである。

1. 森町には石松と云う渡世人はいなかった。これは事実である。
1. 石松の墓は昭和8年、虎造の浪曲により森町と森町のお茶の名声が高まり、売り上が伸びたので、宣伝の為にお墓を建てた。そしてお墓の向いている方向の茶畑の茶の出来が良いと云うジンクスが出来て、墓の向きが絶えず一夜の内に変えられている。
1. 博奕打が呪いの為に墓を欠ぐとの事である。

（今日では1番新しいのと合せて、3基あるとの事である。）

又当時、小政の娘と云う老婆が清水に生存して居た。そして、その老女の話によると

1. 清水一家には森の石松と云う人はいなかった。
1. 客人に石松と云う人が居た様に思う。だからあれは広沢虎造の創作である。

以上により森町生れの石松でなく客人の石松であって、清水に墓があるとその時聞いていないので駿遠には真の彼の墓はない。

これ等二者について、遠方なのに、何故と不審に思われるかも知れない。その頃私は浜松で学生々活を送っており、友人達の話を興味深く思い訪ねたのである。勿論、鞆に石松の墓があるなんて私は知らなかった。

彼の墓は鞆の法宣寺の墓地のものと、彼が亡くなった大分県中津市のものが本物である。石松の従弟の孫、安西ともえ氏と村上義光氏よりの資料を合せて記るさせて頂きます。

1. 石松は天保8年（1837）に大阪城城番与力柴田勘兵衛を父に、足利氏の一族で銀閣寺にゆかりのある安西遠江守の子孫、大阪屋喜助の娘、妙真（旧名不詳）の子として鞆で生れた。
1. 父親柴田勘兵衛は大塩平八郎の槍の師匠であり、親交があった。そこで大塩事変については早く察知していたのか、後難を恐れたらしく妻と親姉弟を船で逃げさした。そこで鞆で石松は生れた。（離縁か？）

勘兵衛は大阪城より町奉行所へ同事変鎮圧応援に派遣され活躍した記録されている由。

尚安西家の方では勘兵衛は弟子である平八郎を殺した後切腹したものと思い込み、生れた石松を尊敬する平八郎の生れ更りと喜んだと伝えられている。

1. 石松は放蕩の末、家出して長州にて渡世稼業人となり、旅烏として全国を股に渡り歩く。
1. 長州は毛利公の領国なる故を以て、人呼んで毛利の石松と云う。
1. 母親は亡夫（死んだものと思い込み）の菩提を弔う為と石松の罪減しのため、出家し、妙真比丘尼と号し後山の寺迫峠の寿量を建て直して庵主となり読経三昧の生活を送り、里人の為に世話役的役割を果たす。
1. 短気で喧嘩早く、義侠心に富んでいた。
1. 刀傷があり、切られて片眼であった。
1. 誰々の代参か不明であるが、両三度金比羅宮に代参し、多度津より鞆に上陸し、藩吏に捕われている。
1. 明治6年、豊前国中津（大分県中津）でなまず切りに切り殺され、知らせがあり叔父が遺骸を火葬にしてつれ帰えった。その時家族が建てたのか、地元の親分さんが建てたのか言い伝えがないが、中津に墓がある。西南の役の時石松の死を聞いて清水の次郎長が建てたのではとも云う。
1. 犯罪者や博徒等は当時は一般に墓を表向きは作らせていない。従って、或は名前をかえて人目につきにくゝひっそりと墓を作り、或は又、親兄弟の墓に葬るのが常であった。彼、石松の場合は世間体を考え、祖父母の墓に葬り、墓の裏側を浅い額縁出腹に彫り、次の如く刻し、又水鉢をつくりかえ、銚子と盃を浮き彫にした。

　　明治6年癸酉
　転孜院宗脇日勇信士
　　10月8日

1. 浪曲で知った時にはあまりにもよく似ているので驚いたと安西ともえ氏は言っている。

以上に依り、毛利の石松を遠州に森村と云う土地がある為、毛利を森として東海遊侠伝に森の石松と記したか、虎造がその様にしたもので、鞆にある毛利の石松の墓と、中津の墓とが森の石松の墓である。

尚参考迄に安西家、柴田勘兵衛に関する資料の一部を次に記す。

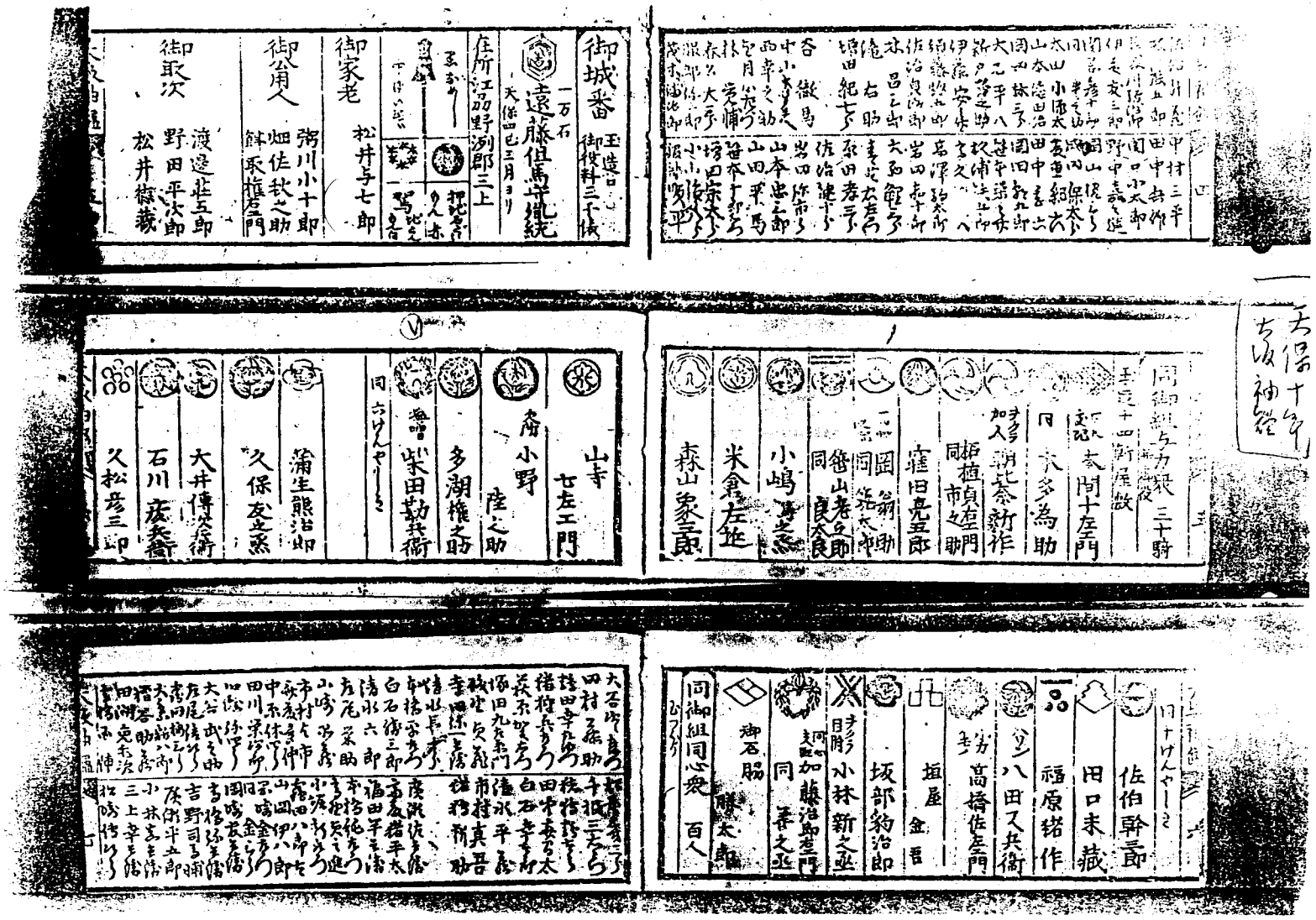
1. 安西家は大坂に出る前は京都に住し、その跡地は銀閣寺のそばにあり「安西家敷」と云う。今尚銀閣寺も丁重に安西家を遇する由。
1. 柴田勘兵衛、慶安元年上総飯野藩2万石の藩主保料弾正忠が大坂城定番（玉造口）に任ぜられ、大城城に赴任の際、与力30騎、同心100名を新規召抱えた。この時の与力、同心が大阪に定着、定住し、世襲であった。柴田家もその一家で代々勘兵衛を襲名した。天保10年の大阪袖鑑（武鑑）参照。
1. 家禄は「200石現米80石」で、与力30騎全部同じ。同心は10石3人扶持。
1. 明治初年の旧大阪城在番の与力や同心が「士族籍復帰願書」の中にも旧玉造に与力柴田勘兵衛の名あり。
1. 大阪城定番与力は譜代扱で、大阪町奉行所与力は抱席で別の組織形態であり、定番与力の方が一格上である。
1. 玉造組与力衆の屋敷は大阪市東区の現在の大阪城公園の東南の一角である。
1. 柴田氏本貫の地は参州（三河）で槍術宗家？であり、柴田勘兵衛が大塩平八郎の槍術の師匠であった事は大阪での大塩平八郎研究者の定説である。平八郎の師匠か、その先代と思える勘兵衛直筆の書状のコピーを参考迄に付す。

以　上

予依先祖微功從
神君於叅州　賜采地有故
蒙
勅許改源姓代々継之然予
五世祖從叅州分家小耒
以藤姓矣先年宗家柴田
勝美推先祖之意而為源
姓也依之以源為姓矣後
耒若先代相傳之槍書與
予所傳之書有校合者則
決不審乎為其證記之
者也

享和三癸亥年
十二月

柴田勘兵衛
照興



御城番　玉造口御役料三千俵　一万石
遠藤但馬守胤統
住所江加野浧郎三上
天保四巳三月より
御家老　松井与七郎
御用人　弼川小十郎　畑佐弥之助　鮮原権左門
御取次　渡辺庄五郎　野田平次郎　松井徹蔵

同御組与力衆　三十騎
寺尾十四新屋敷
同　大多為助
加入　朔北奈新作
同　栢植貞左門　市之助
寵田亮五郎
同　岡部弥助　弥太郎
同　笹山孝五郎　良太郎
小嶋　寿之志
米倉左近
森山象三郎

山寺　七左工門
斎小野　陸之助
多湖権之助
同　柴田勘兵衛
蒲生熊治郎
久保友之丞
大井傳兵衛
石川疾矢衛
久松彦三郎

同御組与力衆　百人
佐伯幹郎
田口来蔵
福原猪作
八田又兵衛
高橋佐左門
垣屋金吾
坂部豹治郎
小林新之丞
加藤治郎左門
同　春之丞
御石脇　勝太郎